現地リポート

メキシコ・シナロア州の光と影

── 大規模農業と麻薬マフィア間抗争 ──

佐藤美季

●はじめに

筆者は、2014年4月に夫の転勤に同行する形で、メキシコ・シナロア州の州都クリアカン（Culiacan）市に転居した。

転勤の知らせを受け、まず、インターネットで検索したところ、画面にあがってきたのは「シナロア麻薬カルテル」、「麻薬マフィア間闘争」、「惨殺死体発見」など不穏な情報ばかりであった。

夫から「シナロア州は、世界の種苗業界にとっては成長著しい地域であり、クリアカン市にあるメキシコ支社は重要な研究および販売拠点であること」、「以前は麻薬戦争とも呼ばれるほど危険だったが、現在はかなり状況が落ち着き、殺人事件数も減っている。殺人事件の被害者の多くは麻薬関係者であり、一般市民が巻き込まれることは稀であり、外国人が犠牲となったことはない」等と説得されて、渋々、同行を了承した。

それから、約3年が経過した。その間、幸いにも、差し迫って身に危険を感じることは全くなかった。むしろ、軽犯罪に関しては、メキシコの他都市に比べて少なく、住みやすいとさえ感じている。

しかし、日本をはじめ世界で報じられるシナロア州関連のニュースは、「シナロア州を拠点とする麻薬カルテルのリーダー、ホアキン・グスマン（Joaquín Archivaldo Guzmán Loera）の脱獄と再逮捕」、そして、つい先日の「麻薬問題を果敢に報じ続けた著名なジャーナリスト、ハビエル・バルデス・カルデナス（Javier Arturo Valdez Cárdenas）氏の暗殺」など麻薬がらみの報道ばかりである。

上記のような麻薬マフィア間闘争により、多くの犠牲者が出ているのは紛れもない事実ではあるが、街中が戦場のような状況かというと、そうではない。実際に筆者が目にする当地の人々の暮らしと、世界中で報道される当地の状況が、大きくかけ離れていると感じている。

そこで本稿では、シナロア州における大規模農業の発展＝光、当地の治安と麻薬関連の問題＝影、そして、光と影がどのように当地社会に共存しているか報告することを目的とする。本格的な学術調査を行ったわけではなく、インターネットで入手できる学術論文、新聞報道、周囲の人々から伝え聞いた情報に依拠して執筆しているため、一部に不確かな情報が含まれている可能性があることを予めご了承いただきたい。

●シナロア州の光の部分
──先進的な大規模農業の発達──

クリアカン市から南方のマサトラン市に向けて高速道路を行くと、クリアカン市はずれの空港周辺には、農業関係の企業の社屋が並ぶ工業団地があり、しばらくすると、広大なトウモロコシ畑が続く。合間に、巨大なビニールハウスが目に入り、はるか向こうに山々がみえる。

また、クリアカン市から海水浴場のあるアルタタ（Altata）市に向かっていくと、製糖工場やトウモロコシ製粉工場があり、これまた広大なトウモロコシやトマト、キュウリなどの野菜畑を抜けて海岸に近づくと、エビの養殖池が広がってくる。

2015年の統計によると（参考文献①）、シナロア州の農業産品は、ナスが全国生産量の96.5％を占める他、キュウリが43.3％、ゴマが38.1％、トウモロコシが21.3％を占めている。その他にも、ハラペーニョ（メキシコ料理に欠かせない緑トウガラシ）、マンゴ、ジャガイモ、ソルガム、ズッキーニなどの10品目が全国生産量シェアの10位以内にランキングされている。

本邦においては、石井章氏や谷洋之氏によるメキシコの農業政策に関する研究の中で、シナロア州は、先進農業地帯として度々紹介されている（参考文献②、

③、④、⑤、⑥、⑦)。

石井氏の研究によると、シナロア州の農業地域は、「高地」、「平野部」、「南部」の3つに分けられる。海抜50メートル以上の「高地」は同州面積の半分を占めているが、住民は人口のわずか1割にも満たず、天水に頼る後進的な農業が行われている。一方、太平洋岸に広がる広大な「平野部」は州面積の26%に過ぎないが人口の約7割が居住しており、灌漑設備や高速道路が整備され先進的な農業が発達している。また、「南部」は、サン・イシドロ（San Isidro）市以南で山地が海岸近くまで迫り、平野部が少ない。

谷氏の研究では、メキシコの領土を考古学的な概念である「メソアメリカ」（Mesoamerica）地域と「アリドアメリカ」（Aridoamerica）地域の2つに大別し、前者においては、先住民の共同的な社会の伝統が現在でも色濃く残り、後者においては、スペイン植民地化以前には定住型の先住民がいなかったため、賃金労働や市場経済が比較的早い時代から浸透したと特徴づけている。

したがって、石井氏の農業地域分類と谷氏の考古学的概念による分類を考え併せると、シナロア州では、太平洋岸の「平野部」のアリドアメリカ地域において灌漑設備や輸送インフラなどが整った先進的農業が発達しているのに対し、「高地」のメソアメリカ地域においては天水による後進的農業が行われていると理解することができる。

クリアカン市をはじめ、ロス・モチス（Los Mochis）市、グアサベ（Guasave）市など、シナロア州の比較的大きな市街地は、太平洋沿岸部の平野部に位置している。特に、クリアカン市周辺は海岸より30キロほど内陸に位置し、クリアカン川 とウマヤ（Humaya）川の水利に恵まれ土壌も良好であるため、農業に最も適していると言われている。

シナロア州の農業発展の歴史は、19世紀末に米国人が米国向けの砂糖やトマトの大量生産を行ったのが始まりである。本稿では紙幅の制限もあり、詳細を述べることはできないが、石井氏と谷氏の研究を簡単にまとめると、その発展の歴史は以下の通りである（参考文献②、③、④、⑤、⑥、⑦)。

19世紀末以降、大土地所有制による大規模農業（ラティンディオ）が展開されていたが、1910～17年に起こったメキシコ革命は、農地解放運動の側面を持っていたため、シナロア州においても大規模な農地改革が行われた。

しかし、第二次世界大戦後に導入された輸入代替工業化政策の下、シナロア州の商品作物は貴重な外貨収入源という認識から、私有地の上限が100ヘクタールまで容認されたため土地の再集積が起こり、中央政府による灌漑施設や輸送手段の整備など大規模な開発が行われた。

また、1990年代初めに導入された新自由主義政策下においても、零細・小規模農業への保護政策は縮小・撤廃される一方で、競争力のある商品作物の大規模生産に対しては奨励策がとられ続けたため、シナロア州の大規模農業は益々の発展を遂げた。現在では、100ヘクタール以上の農家は珍しくなく、1000ヘクタール以上のアグロビジネスを営む企業も多々あるとのことである。

●シナロア州の影の部分①――麻薬問題――

前述のように、太平洋湾岸地帯のアリドアメリカ地域における大規模農業の繁栄は、当地を訪れた人々の目に明らかであるが、一方、高地のメソアメリカ地域には、簡単に立ち入って人々の暮らしぶりを目にすることはできない。

この高地こそ、メキシコ最大の麻薬カルテルと言われるシナロア・カルテルの麻薬の生産拠点となっている。山間の隠れた場所で、大麻や覚せい剤の原料のケシが栽培されているのである。また、平地の一部でも大規模農地の合間の隠れた場所で栽培されている。

「はじめに」でも触れた、世界中のメディアに取り上げられたシナロア・カルテルの最高幹部ホアキン・グスマンは、この高地の小さな村の出身である。彼の生家は貧しく、初等教育を修了することもできないまま、家計を助けるためにケシや大麻の栽培の手伝いをしていたが、伯父から麻薬組織に加わるように勧められたのがきっかけで、麻薬マフィアの世界に入った。

先住民社会の伝統を色濃く残すメソアメリカ地域では、コミュニティでの互恵関係がアリドアメリカ地域よりもより強固で、カルテルの創成期にはその互恵関係が大きく関係したのではないだろうか。現に、他の麻薬マフィアグループが内部分裂を繰り返す一方で、シナロア・カルテルが1980年代後半から急速に成長していった背景には、創成期の幹部達の多くが血縁地縁

でつながった縁故者であったため内紛が起こりにくかったと言われている。

シナロア・カルテルは、1980年代半ばに誕生し、1990年代初めにコロンビアから米国への麻薬密輸ルートが衰退したのを代替する形で、徐々に勢力を伸ばした。特に、1994年にNAFTAが成立し、米国向け物流が急増したのに乗じ、大量の麻薬を密輸するようになった。その密輸方法や売買ルートは、年々洗練され高度化され、組織のネットワークもシナロア州内にとどまらず、メキシコ・米国さらには欧州、アフリカ、アジアにも及んでいるとみられている（参考文献⑧）。

●シナロア州の影の部分②――治安の悪化――

今年5月15日、クリアカン市内で、麻薬戦争の問題を世界に発し続けた著名なジャーナリスト、ハビエル・バルデス・カルデナス氏が路上で射殺された。

バルデス氏は、2011年に米NPOジャーナリスト保護委員会（CPJ）の国際報道自由賞を受賞するなど、その業績は広く評価されていた。

バルデス氏殺害のニュースは、日本をはじめ世界各国で報道され、当地の治安の悪さを改めて国内外に印象づけた。フランス通信（AFP）は、メキシコでは2000年以降、102人の報道関係者が殺害されているが、今年に入ってすでに5人目、昨年2016年には11人が犠牲となっており、これは、シリア、アフガニスタンに次ぐ数であると報じている。

当地では、昨年あたりから、一旦は落ち着いていた麻薬マフィア間闘争の再激化が懸念されるようになってきた。2017年5月15日付の『エル・デバテ』（*El Debate*）紙電子版は、過去20年間で最悪だった2011年の水準（シナロア州内の殺人件数692件）に迫るペースで殺人が起こっており、2017年中の殺人件数は少なくとも600件を超えるだろうと報じている。シナロア州の人口10万人あたりの殺人発生率は21.7人であり、日本の2016年の発生率0.31人（参考文献⑨）と比較すると、いかに多いかが分かる。ちなみに、クリアカン市だけで、2016年には469件の殺人があり、同値は51.81人にも上る。

しかも、当地では「遺体無き殺人事件」も多いとみられており、公式発表されている殺人件数は氷山の一角であるとも考えられる。『エル・デバテ』紙によると、失踪届けを出したところで、行方不明者が発見されるのは100件中3件くらいに留まるため、失踪届を出さない家族が多いということである。バルデス氏の著書にも、組織からの報復を恐れ、捜査届を出すのを躊躇する家族も多く、果敢にも当局に強く真相の調査を要求したがために、家族が何者かによって殺害された例もあると書かれている（参考文献⑩）。

バルデス氏殺害事件の捜査と裁判を求める抗議集会の様子を報じる当地の新聞

最近の殺人事件の増加の主な理由は、シナロア・カルテル最高幹部グスマン逮捕により求心力を失ったカルテル内の権力争いであるとみられている。具体的には、グスマンの息子達の一派と、かつてはグスマンの腹心であったダマソ・ロペス　ヌニェス（Dámaso López Núñez）の息子の一派の衝突であると言われている。また、シナロア・カルテルの内紛に乗じて、勢力拡大を図ろうとするフアレス・カルテル等、他の麻薬密売組織との勢力争いが激化している模様である。

●シナロア州――光と影が混在する社会――

前項までに、シナロア州における光＝農業分野における発達と、影＝麻薬カルテルと治安悪化の問題について言及してきた。

筆者が、クリアカン市に転居して驚いたことの1つは、この光と影が身近なところで混在しているということである。我が家が居住する分譲住宅団地の例を挙げて説明したい。

その分譲住宅団地は、当地では、プリバダ・レジデンシアル（Privada Residencial、以下プリバダ）と呼ばれ、団地の周囲は高い塀に囲われ、入り口は24時間体制で警備されている。このようなプリバダは、2000年代に入って雨後の筍のように軒並み建設されたそうで、過去10数年間の当地の景気の良さを物語っている。

光と影が共存する分譲住宅団地プリバダ内

プリバダ内の公園にある殺害された住民の記念碑。
毎年、父の日にはお供え物がある

当地の新聞の社会欄に、貧しい家庭に育った女性が、豪華な暮らしに憧れて麻薬マフィア関係者の恋人や配偶者になるという記事が出ていたが、その憧れの暮らしの描写の1つに、クリアカン市内のプリバダに住むというものがあった。

大規模農場で雇用される農業労働者の人件費は、日当300ペソ（2017年7月13日の為替レートで約1900円）程度だそうである。プリバダで賃貸に出されている一番狭い120平方メートルほどの3LDKの一軒家の家賃は、月額6000～8000ペソ（約3万8000～5万円）程度で、農業労働者の月収とほぼ同じくらいである。

では、プリバダにはどのような人々が住んでいるのか。筆者のプリバダ内の友人・知人達の家庭の世帯主の職業は、大規模農業の生産者、エビ養殖輸出会社経営、不動産業者、建築会社経営、会計会社経営、開業医などであるが、中には、職業について全く触れない人たちもいる。同じ通りに住んでいる何軒かのうち、麻薬関係者ではないかと思われる家もあるが、挨拶はするものの、それ以上の接触はない。

団地内の公園の脇に、数年前に殺害された住民の記念碑があったり、一昨年には、夜中に家主と息子が銃撃され射殺される事件があったり、機関銃を構えた兵士を乗せた車輌をみかけたりしたことから、このプリバダにも麻薬マフィア関係者が少なからず住んでいることが推察される。

しかし、プリバダ内での生活は平穏である。あえて関りを持とうとしなければ、この街で起こっている暴力は遠い世界で起こっていることのように感じる。

●むすびにかえて

前述のジャーナリスト、バルデス氏が訴え続けたことの1つは、「暴力を前に黙らない」ということであった。彼の著書には、殺人被害者や行方不明者の母親や子供達の嘆き、危険と隣あわせのジャーナリスト達の実情など、最も弱い立場にある人達の言葉を代弁するものが多い。

それらは、既得権益で優雅に暮らしている人々にとっては、耳障りな言葉かもしれない。筆者自身も、対岸の火事を見物しているような気がして、罪悪感を覚える。クリアカンに数年しか住む予定のないよそ者の筆者ができることは少ないだろう。

しかし、よそ者だからこそ強く感じるのは、この社会の歪みである。20数年前、筆者がメキシコ・シティに留学した頃はまさに、サリナス（Carlos Salinas de Gortari）政権が政府の介入を削減し、市場原理に任せるという新自由主義的な経済政策を導入し、

NAFTAに加盟したばかりであった。

当時、新自由主義政策は弱者切り捨ての政策で、少数の富裕層はますます富み、大多数の低所得者層はますます貧しくなることを危惧する声が多々あった。それに対して、新自由主義政策によって、まず経済規模のパイを大きくし、富を再分配することによって社会全体が豊かになるという理論をよく耳にした。

20数年が経過し、シナロア州の場合はどうであろうか。州内アリドアメリカ地域の大規模農業生産者は、新自由主義政策とNAFTA加盟で多大な利益を得たが、その富を再分配する社会システムは存在するのだろうか。

シナロア・カルテルが急激に勢力を伸ばし始めた時期は、新自由主義政策を導入しNAFTAに加盟した時期に重なる。また、そのカルテルの幹部の多くが、新自由主義で切り捨てられたメソアメリカ地域の寒村の出身である。

メキシコ農業の後進的な零細・小規模農家と先進的な大規模農業生産者という二重構造と、零細・小規模農家の貧困の問題は以前から問題視されており、新自由主義政策の導入やNAFTA加盟がこれらの格差問題やシナロア・カルテルの台頭の直截的な原因であったとは断定できないだろう。

しかしこのままでは、貧しい生活に疲れ、あるいは、合法的には決して手に入らない豪華な生活に憧れて、麻薬マフィアの世界に身を投じる若者は後を絶たないであろうし、マフィア間の抗争は際限なく繰り返され、社会不安はこの地域からなくならないだろう。

長い時間をかけて形成された社会の歪みを正すのは容易なことではない。ただし、希望が全くないわけではない。最後に、希望となり得る当地における動きを紹介して、この現地報告を締めくくることにする。

社会面においては、バルデス氏の死をきっかけに「真相の解明と公正な裁判」を求める運動が起こり始めている。ほとんどの殺人事件が未解決のまま、真相が明らかになることがない当地で、この運動はとても重要である。社会構造を変えようとする新しい一歩であろう。

マクロ経済政策面においては、エロイ・シナガワ（Eloy Gonzalez Shinagawa）前シナロア州政府経済開発顧問によると、シナロア州内のマサトラン港およびトポロバンポ（Topolobampo）港の港湾整備と工業団地建設、ガスパイプラインと天然ガス・ポートの建設、マサトランからタマウリパス州マタモラス（Matamoras）港およびトポロバンポ港から米国ダラスまでの2本の横断高速道路の開通など、大規模な化学工業インフラ開発プロジェクトが最終段階にある。産業構造が多角化することにより、新たな雇用が生み出される可能性が期待できる。

（さとう　みき／シナロア自治大学非常勤講師）

《参考文献》

① Kenia Meza, “Los 5 Principales Productos Agrícolas en Sinaloa,” Tus Buenas Noiticias（TBN）. http://tusbuenasnoticias.com/los-principales-productos-agricolas-sinaloa/（2017年6月20日閲覧）。

② 石井章『メキシコの農業構造と農業政策』アジア経済研究所、1986年。

③ ――『多面体のメキシコ――1960年代～2000年代――』明文書房、2013年。

④ 谷洋之「メキシコにおける農地所有制度の変遷」北野浩一編『ラテンアメリカの土地制度とアグリビジネス』調査研究報告書、アジア経済研究所、2013年、第2章。

⑤ ――「メキシコにおけるトウモロコシ生産・流通・消費の動向――自由化から新たな輸入代替へ？――」清水達也編『食料危機と途上国におけるトウモロコシの需要と供給』調査研究報告書、アジア経済研究所、2010年。

⑥ ――「拡大するメキシコの温室トマト輸出と地域発展の可能性」『ラテンアメリカ・レポート』Vol.24、No.2、2007年、10～19ページ。

⑦ ――「メキシコにおけるトマト生産――NAFTA後の変化を中心に――」『開発学研究』22巻3号、2012年3月、9～16ページ。

⑧ ウェブサイト「El Mundo del Narco もうひとつのメキシコ――麻薬カルテルと暴力の文化――」https://aqui-yo.jimdo.com/（2017年7月5日閲覧）。

⑨ ウェブサイト「Global Note」http://www.globalnote.jp/post-1697.html（2017年7月5日閲覧）。

⑩ Javier Valdez Cárdenas, *Huérfanos del narco*, Aguilar, 2015.